

▶台湾日帰り登山+観光

台湾で山登りといえば、誰もが最高峰の「玉山」を連想する。玉山へは行ってみたいが、体力の心配があるし、5月の連休でもあり、物見遊山気分で行ける簡単な山を探した。日本ではあまり知られていない、「ご当地有名ハイキングコース」の山が台湾にもあるだろうと考えた。サブザック程度の日帰り登山プラス観光だ。

予備知識がないので、どこでもよかったのだが、「中華民国交通部観光局(日本語版)」のホームページを探し当て、「阿里山」と「陽明山」に決めた。「阿里山」という名前のマッサージ屋さんが、私の職場近くにあり、字面から、何となく「アリサン」とは韓国の地名と思っていた。

2005年4月30日、台北に着いて2日目、きょうは「陽明山」へ行く日である。「陽明山」とは台北から北東に位置する山塊の総称、最高峰は「七星山(1120m)」。日本でいえば箱根山のような感じの火山で、温泉や、リゾート施設がある点も似ている。山のかなりの部分が「陽明山国家公園」になっていて、台北市民に親しまれている。

日本の旅行会社で手配してくれた現地旅行社のガイドは、邱秋梅さん(客家出身)、日本に留学経験がある女性だ。彼女と朝6:30に台北のホテルロビーで落ち合う。前日飛行場でお目見えしたときの彼女は、世界共通ガイド服ともいべき、黒衣装だったが、今朝は赤いウィンドヤッケとディバッグの登山者スタイルだ。靴も赤で、富士山に登ったときに買ったものだそうだ(買ったのは台北)。私は富士山には登っていないので、彼女の方が「山歴」が上位だ。

邱さんを先頭に、ホテルを出発。バス停まで繁華街を歩いて抜けていく。早朝なので、各商店やオフィスビルはシャッターが閉まっている。その閉まったシャッターの、ガラスとした軒下の歩道で働く人たちがいた。それは新聞売りである。広告を挟んだり部数を揃えたりの仕分けをしていた。このような作業は、日本なら新聞各社ごとの販売店があって、屋内であるのだが南国台湾では冬の寒さもないせいか、外でやる仕組みらしい。

各商店、ビルの前の歩道は、連続した屋根のアーケードだ。ただし、アーケードの上はすぐ家屋になっている、つま



陽明山の代表的植物/通泉草、別称六角定莖草、ゴマハグサ科

り歩道の幅だけ1階の建物が後退しているのだ。これは屋間の直射日光、暑さ、風雨を避けるための知恵だ。それぞれが私有地に随時作ったのか形が不揃だし、足もとに段差があたりする。歩道の段差がなければ良い仕組みで、このアーケードのおかげで新聞の仕分けが野外のできるだろう。この連続した商店街の屋根は、主な道のほとんどにあり、我が国で新潟の古い街に残る、雪除けの「雁木」造りによく似ている。

▶バスで陽明山国家公園へ

台湾の公共交通機関は、よく整っているし、日本と比べると安い。そのせいか、我々も台北から登山口まで公共のバスで行く手はずとなっていた。一行5人(ガイドも入れて)は都会の横丁といったおもむきのバス停から、「金山」という北海岸の街へ行くバスに乗った。この路線が、きょう登る「七星山」登山口を経由する。一緒に乗りこんだ地元客数人もハイキング姿や行楽支度だった。

バスは意外とデラックスで、日本なら長距離夜行バスに使うような3列シート配置でゆったりとしている。始めは、がら空きだったが、台北市内の停留所に止まるごとに、少しずつ乗客を拾って、最終的には座席は8割方の乗車率になった。台湾はマイカーが日本ほど普及してないせいか、バスの乗車率は日本より高いと思う。一昔前の日本も観光地のバスは繁盛していたのを思い出す。

郊外に出ると多かった車も少なくなって、緑が多くなる。天気もよく、だんだん遠足気分になってきた。やがて市街地を抜け山道になる。傾斜道でもたっぴり2車線をとった幹線道路は進むにつれ、いくつかのヘアピンカーブを重ねて山奥へと導かれた。

▶風に吹かれて台北市最高峰へ

台北から約1時間、目的地のバス停「七星山前」に着いた。「登山口」ではなく「前」と名付けるのが、台湾式なのであろう。下車地のおよその標高は730m、そうすると400mほどの登れば「七星山」なので楽なものだ。降りてみて判ったのだが、かなりの風が吹いている、帽子が飛ばされ



七星山頂上と風ではためくススキ

そうだ。まわりには、背の高い樹木はなく、ススキと灌木、ササで草山という印象である。階段状の道を登るとすぐに見晴らしのよい台地着いた。ここには、車で来る人のための駐車場と売店、トイレがあった。時刻が早かったので売店はまだやっていない。早起きをしたため、食べ損なった朝食をここで摂ることにする。とはいっても、猛烈な風なので弁当屑などが飛ばされないよう、建物の陰に陣取る。弁当は、ホテル内の軽食屋が作ったサンドイッチだ。味はまあまあといったところ。大きめの紙コップに入ったコンソメスープが付いて、中国風だと思った。日本流は遠足用弁当にスープは付けない。台湾でも、日本と同じようにパン食が広まって、米の需要が頭打ちだそうだ。台北の街角にも、店頭でサンドイッチ制作中のパン屋がかなりの頻度で目に付いた。

食事を終えて、小道を登るとすぐに爆裂火口のへりに出た。「小油坑」という名勝地で、すり鉢状の窪地の中から噴煙が上がっている。日本でも火山地帯なら各所にある爆裂火口だ。登山道から人が落ちないように、しっかりした柵が続く。早くも下山する人もいて、「早！」などと、すれ違うときに挨拶を交わす。我々のご婦人方2人は、ガイドともども、見慣れない花や、見慣れた植物によく似た草に出会うと、そのつど立ち止まり評定するので、なかなか進まない。

やがて急坂の窪地をひと登りで、小尾根に取り付く。風がよけい強くなったが、見晴らしも良くなった。行く手眼下には遠く台北近郊のビル群が林立し、左手北側には山に挟まれた海岸線の一部が望まれた。邱さんの説明では、この山はススキが美しいので名高いそうだ。まだ若い火山なので、森林の形成までいたらないのであろう。山頂が間近になった。頂上を囲むススキの原は、絶え間ない風にさらされて、葉裏が逆立ってはためぎ、陽光を浴びて輝いていた。豊かな日照のためか、たくましいススキだった。

10:40、七星山到着。山頂は小規模な岩場で、「三角点」と「一等衛星控制点」というプレートを付けた石柱がそれぞれ埋め込んであった。人気のある山なのだろう、幾人ものひとが思い思いの格好で、グループ、家族連れと山頂に上がってくる。日本の山より若い人の割合が多いと感じた。

展望を十分楽しんで、次は「七星山東峰(1107m)」へ向かう。といってもわずか250mほどの距離なので、ちょっと下ってちょっと登ると着いてしまった。ここではあまり休まず、下山道を進む。我々がとったコースは七星山を北西から南東に越える道だった。しばらく急坂を下ると、照葉樹林の中に入った。風があったので暑くはなかったが、日陰になってほっとする。下から登ってくる一行に道を譲ったり、後ろから迫ってくる早足下山者に道を空けたするのは、日本と同じだ。違うのは、危険注意箇所に設ける柵が、木に似せたコンクリートの柵ではなく、竹に似せた、コンクリートの柵なので、お国柄を感じた。

途中の吾妻屋で一休みして、持参の果物(もちろん台湾産)を食べる。「蓮霧(レンブ)」などというザクロの一種のリンゴのような果物をかじると、台湾を感じた。

なおも下山道を行くと、広い舗装道路に出た。道路の向



七星山、山頂マスクは日本の花粉症のなごり

こうに駐車場と、バス停、トイレ、及び「冷水ツーリストステーション」という観光案内所があり、きょうの歩行はここまでとする。ここはバス停でいうと「冷水坑前」という。「冷水坑」というスポットがあったのだが、知らなかったので見逃してしまった。

昼時なので、セルフサービスの軽食を供する食堂で昼食をとる。台北での夕食を期待して、ここでは軽く食べる。カップ麺を食べる者や、私は肉粽(バーツァン)というちまきを食べた。食堂の売店ではでは、案内文付地図(日本語版、正式名は「陽明山国家公園案内図」)や植物案内図(繁体字)なども売っているので買い求めた。

日本語版地図は2万5千分の一、2002年制作で良くできている。山では日本人に会わなかったが、温泉巡りの日本人観光客などが買い求めるのか。この手の地図はあまり売れるとは思わないが、台湾当局の配慮の細やかさを感じたし、この拙文を書くのにずいぶん世話になった。「ゴミを捨てると、最高1万5千元(約5万2500円)の罰金です」などと決まりが書いてあるのもおもしろい。この地図が、日本で事前に入手できたなら、バスの案内や、詳細なコース案内もついているので、たぶんガイド無しでも歩けたと思う(登山口までタクシーで入れればよいので)。ただし紙質は良くない、何回か開いているうちに、折り目に穴が空いてしまった。

▶ 温泉はまぼろしに

ひと休みの後、ガイドの邱さんに「このあとどうしますか」と問われ、まだ昼過ぎなので、温泉行を希望する。路線バスを乗り継いで台北市ご自慢のMRT(台北新交通システム)の新北投駅まで行った。バスを降りると暑い、下界は30℃はあったであろう。この中を邱さんに導かれて、行ったところは、駅前の豪華温泉施設。温泉はここだという。値段はなんと、1000元(約3500円)! 山帰りの汗を流す、もっと素朴な温泉を期待していた我々は、即座に辞退。帰国してから調べると付近にもっと安い、日本式温泉旅館の風呂があり、そこへ行けば満足だったろう。ガイドの考えと、我々の希望がずれたひとこまであった。邱さん自身は、普段はもっと安いところへ行くそうで、そこで良かったのだが。

こうして、台北のハイキングは終わった。

(阿里山に続く)

▶ 阿里山と森林鉄道

今から250年以前、ツォウ族の酋長・阿巴里が発見し、以後多くの獲物を部落にもたらしたため、彼の名にちなんで阿里山と名付けられた(中華民国交通部観光局のホームページより)。

阿里山森林鉄道は鉄道愛好家の間ではかなり有名ならしいが、私はほとんど知らなかった。旅行前に調べたところ、日本統治時代に日本資本が森林資源(ベニヒノキなど)を搬出するため台湾各地に森林鉄道を敷設した。しかし林業の衰退とともにほとんど廃線になったが、阿里山鉄道のみ観光用として復活、現在に至っている。3重ループや、スイッチバックなど旅人が喜ぶ、道具立てではそろっている。料金は399元。我々が乗ったのは13:30発であった。

森林鉄道は、嘉義駅(海拔30m)から71.9km、阿里山駅(海拔2274m)まで登る。その日の乗車率は、ほぼ100パーセントで、すべて観光客。5月の連休中ゆえ半分ぐらいが日本人だった。熱帯から温帯までの植物の垂直分布が見られるというのだが、ぼーっと景色を見たり駅弁を食べたりしている間に、5時頃阿里山駅に到着、涼しい。ホームは板張りで、地震で壊れたあとに作った仮設駅である。

改札を出るときに「阿里山国家森林遊楽区環境美化及清潔維持費」という長い名目の入場券を徴収された(150元)。改札を出ると、「…賓館」や「…大飯店」の出迎えの車で狭い路上がにぎわっていた。駅前の広場に土産物屋が何軒あるほかは、木立の中に小規模の「賓館」が点在している静かな保養地である。我々も「阿里山賓館」の送迎バスに乗り今宵の宿に向かった。

阿里山という単独の山はなく、地名である。また、山脈名に「阿里山山脈」があり、こちらは台湾最高峰の玉山を主峰とする玉山山脈の西に派生する枝脈の名前だ。烏龍茶で「阿里山高山茶」というのは、この一帯の標高1000m以上の茶畑で産するものを云うそうだ。

夕食はホテルで摂った。ホテルの食堂は、2方がガラス窓で外景に面しており、明く見晴らしも良い。ちょうど、山



「阿里山賓館」付近からの大塔山(2663m)

かげが黄昏に溶けこんでいく時間帯であった。テーブルに置かれた花瓶に一輪の花、「夜来香」だと邱さんが云う。歌の名前で名高い花はこれかと、見直す。クチナシに似た上品な香りだ。窓の外が闇になり、夜来香が引き立った。

5月3日、早起きしてご来光を見るための列車に眠気をこらえて乗り込んだ。4:30頃出発し、「祝山駅」まで行った。ここは日の出と雲海がすばらしいとの前宣伝だったが、あいにく雲が立ちこめて、日の出はなかった。それでも宣伝の効果があり、大勢の人が押しかけ見晴台はにぎわった。

▶ 鉄道線路に沿って

列車にてホテルに戻り、朝食を済ませる。そのあと今日の本題である「ハイキング」に出かけた。観光地である阿里山での山歩きは、あまり期待していなかった。ホテルから近い、森林内の遊歩道を歩くものと思っていたが、夕食のときにガイドの邱さんが「人のあまり行かない道がありますが、どうしますか」と水を向けてくれたので、そちらに行くことにした。台中大地震(1999年)で崩れた支線の森林鉄道がある方向なので、復旧工事の関係で、通れないかもしれないが…という注釈付であった。

9:00出発。ホテルを出て坂道を上り、10分ほどで阿里山駅より一つ先にある「平沼駅」に着く。構内にある小さな土産物屋で烏龍茶煮の茹で卵を買う。そこからは道路を離れ、線路の中を歩いた。線路内を歩くのは一般的に禁忌であるが、阿里山駅から先は、早朝の「看日火車(日の出号とでも云うべきか)」のほかは終日列車の運行がないので、危なげなく歩ける。本当は禁止されているようだが…。全く往来がないわけではなく、エンジンを付けた作業用のトロロコのようなものが、作業員を3人ほど乗せて行き来した。遠くで音がすると、線路から退去してやり過ごす。

なおも線路を歩く。まわりはヒノキの林で、暗い。路床の砂利が半ば埋もれているので、歩きやすい。枕木も気にならない。たまに明るい草原があると、ジキタリスの花が咲いていた。原産地はヨーロッパとのことなので、どうしてここに? 線路に平行して「正しい歩道」もある。しかし、そちらは地形を忠実に反映し、上下の坂があるので疲れる。わ



阿里山登山列車、これは帰路の「看日火車」。往路の時は外は真っ暗

れわれ軟弱登山隊にとって、平らで楽な線路内歩行は麻薬のようなもので、ふんざりよく離れられない。

とうとう楽な線路内を離れる。「正しい歩道」は線路と分かれて右に折れると、急な階段で木立の中を登っている。木枠で作った階段が続く山道に入った。おんな衆は台北の陽明山のときのように鳩首して、草花の吟味を繰り返すので、歩調は夜店歩きと変わらない。

どこまでも、木枠で小道を保護をした「遊歩道」である。あまり利用されないようで、へのり摩滅はない。危険箇所もない、安全第一の道である。巨大なヒノキの切り株がときおり現れる単調な山道だ。9時半ごろ小休止。持参のマンゴーなどを食べる。

高度が上がると、ネマガリダケのような笹が茂っているところもあり、時期なのでタケノコもあった。一つ折って試食すると、えぐみがある。タケノコ取りの地元の人もいた。

▶ 思いがけずのぼれた大塔山

私は、事前に受けた邱さんの口ぶりから、適当なところで引き返すのであろうと思っていた。どこで引き返すかと思いつつなお進むと、いつしかヒノキはまばらになり、空がひらけて、尾根の肩に付けられた道を行くようになった。雲は多いが、青空ものぞくまあまあの天気だ。樹木が途切れて視界が得られると、左手下に樹海が広がり、その中に阿里山のホテル群や付随建物が白く散らばっている。かなりの高みで、昨夜ホテルの食堂から見上げた、岩山の一角にいるのが判った。やがて、行く手に魁偉な岩峰が立ちふさがった。今までは、楽で安全な遊歩道であったが、この先どうなるのであろうと、興味と不安を少々まじえて進む。

しかし危険な箇所もなく、あっけなく岩峰の基部まで来てしまった。咲き残りのシャクナゲが現れた。行く手の道はうまく岩壁を回り込むようになっており、難しいところもなく山頂まで行けそうだ。邱さんは弾んだ声で、実はここまで来たことはないと打ち明けた。以前に客と来たときはもっと手前で引き返したという。彼女は山頂を前にしてガイドの仮面は消え、嬉しそうな登山者の表情となった。仕事で遊べるのはうらやましい。

山頂直下まで来ると、コンクリート製建物があつた。その脇を通り、裏手にある階段を登ると山頂だった。12:30到着。そこは、岩の間に檜を組み、板張りの床と手摺りを巡らした見晴台になっていた。まあ、屋根の上の物干し場といったおもむきである。構造はしっかりとしており、安心して崖下をのぞき込むことができる。見晴台の4辺を順々に巡り、眺望を堪能した。雲が多いのであまり遠望はきかないが、今いる尾根の先には、けんのんな岩山が徐々に高度を下げて連なり、「異境」の雰囲気満々だ。山頂の標識は何もなく、ここは何という山？ 高さは？

景色に観とれていると、トレーナー姿の50歳代と思われる男性が現れた。彼はいつの間にか邱さんと話をしていて、男性の現れるところを観ていないので、突然登場という感じであった。邱さんの説明によると、彼は揚さんといひ、山頂下のコンクリート建物に住んでいるという。ホームレスではなく、電波関係の仕事(よく理解できなかったが対



大塔山、高度感あふれる山頂付近の岩。左が揚さん

大陸のため?)をしており、れっきとした公務員。近々新しい施設に引越すそうで、今ある施設は閉鎖されるそうだ。最盛期には8人が詰めていたという。

揚さんは、見えている岩尾根づたいに、「次のピークまで案内する」と親切に誘ってくれたが、その方面は観るからに恐ろしい山容なので、丁重に辞退。格下げ代案として隣の岩コブまで案内してもらうことになり、軟弱登山隊は次善の案でほっとした。隣の岩コブでも十分に怖く、心臓に悪い。どう怖いかというと、まず掴まるものがない。目的の岩コブは、ヤカンの表面のようにのっぺらぼうで、端は放物線を描いて虚空に落ちている。つまり角が大きなアールになっていて、その先はのぞき込まないと見えない。ヒッチコック映画で、主人公が片手でぶら下がる場面がよくあるが、のっぺらぼうの岩で気の利いたロープや、岩角はない。バランスを崩してプロペラのように手を回す自分を想像すると、足もとがすくむ。

台中大地震のあとで日本人がここに来たのは、初めてだと揚さんは云った。この山は「大塔山(2663m)」といひ(付近に別の塔山がありこちらは、小塔山と呼ばれている)、阿里山山脈の最高峰であることをあとで知った。台湾には、五大山脈というのがあって、阿里山山脈もその一つである。

このあと、揚さんがラーメンをごちそうしてくれることになり、彼の住居兼職場のコンクリート建物を訪問。入り口そばの小さい部屋を左右にやり過すと、奥に15畳くらいの大部屋があり、そこを本拠地にしていて、テーブルと、椅子が数脚、コンクリート床に広げた寝袋が一つ、水の入ったペットボトルなど。有り体に云ってかなり殺風景である。登山用コンロでお湯を沸かし、ちょっと辛口の台湾製カップ麺を皆で頂戴した。水は天水を用いていた。

復路は足取りも軽く下山。2時過ぎにはふもとの降りてしまった。「阿里山遊歩道」がホテルの方向なのでついでに見学。遊歩道内には巨大なヒノキの切り株が幾つもあり、日本人が来る前は、巨木の美林であつたらうと思った。

ホテルに戻るとすぐ、雷鳴がとどろき、いなびかりもまじえた土砂降りの雨となった。少し時間がずれたら濡れるところだったが、台湾滞在中は一度も雨に濡れなかった。

(完)